

## 第3回 長野市活力ある学校づくり検討委員会 議事録（要旨）

### 【開催日時】

日 時 平成28年11月15日（火）午前10時から正午  
場 所 長野市役所 第一庁舎 5階庁議室

### 【出席者】

（委員）

山沢委員長、井ノ浦委員、風間委員、志川委員、高橋委員、田川委員、西脇委員、松岡委員、  
鷺澤委員

（長野市）

近藤教育長、松本教育次長、熊谷教育次長、小池教育次長副任兼総務課長、倉島主幹兼小中高  
連携推進室長、塚田主任指導主事、新村係長、菊池主事、中村指導主事、寫田指導主事、千野  
指導主事、山岸指導主事、田中指導主事、関指導主事、深澤指導主事、藤森指導主事

### 【会議次第】

- 1 開 会
- 2 あいさつ（教育長）
- 3 議 事
  - (1) 「活力ある学校」について
    - ・地域発 活力ある学校づくり推進事業  
連携推進ディレクター（篠ノ井東中学校区）の取組
  - (2) 「通学区制度」について
  - (3) 「学級編成の基準」について
  - (4) 「小・中学校の教育活動」について
    - ・市立中学校の部活動
    - ・子どもの育ちや学びについて
- 4 次回開催予定
- 5 閉 会

### 【会議資料】

資料1 篠ノ井東中学校区の取り組み

資料2 「通学区」について

※追加資料1 「通学区参考資料」（当日配付）

資料3 「学級編成の基準」について

※追加資料2 「平成28年度 市町村立小・中学校 学級編成基準」（当日配付）

資料4-1 市立中学校の部活動

資料4-2 18歳までに育てたい具体的な姿や能力・態度（例）

## 【発言要旨】

(委員長)

- 今回は、長野市における教育とは何かというような議論の第一回目というイメージである。

### － 資料1 事務局スライド説明 －

(委員)

- 育成会が複数校にまたがるので調整が大変という課題はどこでも同じだし、小学生が中学校への理解を深めるため行う行事は全市で一斉に行えば解決すると考える。

(事務局)

- 小中連携事業は、昨年から連携推進ディレクターが地域に入り、小中や小学校同士の連携を促進する事業で、まだ始めたばかりであるため、子どもたちの移動手段や日程調整などの課題が出てきたところである。

### － 資料2 事務局説明 －

(委員)

- 我が家は昭和小学校の通学区域だが、道を渡ると通明小学校、国道を渡ると篠ノ井東小学校の通学区になる。限定隣接学校選択制度のチラシが市から配布された。昭和小学校へは集団登校になるが、篠ノ井東小学校を選んだら登校はどうなるのか、地区の行事はどうするのか、篠ノ井東小学校はどのような特色があるのか等の情報がなく、チラシだけ配られ、保護者一任だった。そのような地区の保護者に対しての説明はしていただけないのか。

(事務局)

- 限定隣接学校選択制度は、大規模校を解消するため、また、指定された学校の方が遠いという地区の保護者の要望に応じて導入した経過がある。
- 対象の学校に問い合わせいただければ、登校班のことはお答えできるし、学校の特色は学校のホームページに掲載している。そのような点を配布資料に記載したい。

(委員長)

- 限定隣接学校選択制度は、保護者の要望と大規模校の解消のためということであるが、小中連携を確立しようという点では有効なのか。

(事務局)

- 幼保小中の連携、接続をもっときめ細かにしようという目的で取り組み始めたのが、連携推進ディレクターの事業である。12のモデル地区に配置している。説明があったように、連携していくことは子どもたちにとってかなりよい効果が出ると思われる。

(委員長)

- 長野市全体に連携推進ディレクターを配置できれば、学校のシステムの一端を担うことができると考えてよいか。

(事務局)

- そのとおりである。

(委員)

- 同じ小学校から進学する場合でも中1ギャップは起きるのか。

(事務局)

- 中1ギャップは同じ小学校から進学する場合でも起きることもあるし、複数の小学校から進学しても起きない場合もある。
- 本市は「しなのきプラン29」で0歳から自立した18歳を目指し、小中一貫校というような制度ではなく、子どもたちの成長が円滑につながっていくよう、幼保と小、小と中の円滑な接続を目指す連携型一貫教育に取り組んでいる。

(委員)

- 学校の活力をどう捉えるのか、地域、子どもたちにとっての地域をどの範囲で考えるのか、この二点がポイントになると思っている。
- 最初の活力については、学校の教育の質を考えたとき、発達段階に応じた見方をしなければいけないと思う。小学校の低中学年とそれ以上の子どもたちにとっての学校の活力の質は違うのではないか。
- もう一つは、地域の広がり・つながり方で、長野市の場合、中山間地域と市街地で違いがあり、これは一度に整理がつかないと思う。特に市街地の地域はかっちりとしたコミュニティではなく、緩やかなつながりを模索していく方法もあるのではないか。例えば「学校群」という考え方の中で一つの方向性を出していけたらよいと考える。

(委員長)

- 都市部での地域、地域性をどのように育てていくのか、どう定義するのか。これが非常に大きな問題になるのではないか。

—資料3 (学級編制の基準について) 事務局説明 —

(委員長)

- 追加資料の2、小学校では平成34年度は市費で負担している講師も入れると7人増、県費負担は62人増となっているが、本当にこうなるのか。

(事務局)

- このようにはならないだろう。文部科学省は児童生徒数にあわせた学校づくりを行っている。子どもの数が減るから当然学級数も減り、教員の数も減るということで、日本全国で教員を5万人減らそうとしている。そのため、このような配置は困難になるだろうと思う。

— 資料4 (小・中学校の教育活動について) 事務局説明 —

(委員長)

- 部活動、スポーツに限定するが、信更、戸隠、信州新町、中条など人数が少ない部活は、地域の方々と一緒にできるのか。

(事務局)

- そのようなことも可能で、地域の方に指導してもらうことはあると思う。

(委員)

- 小さいころから地域のスポーツクラブ等に参加している子どももいると思うが、そのような生徒の数を長野市教育委員会として把握しているか。

(事務局)

- 把握している。

(委員長)

- 資料4-2、小学校で個の育ちから集団の育ちとあるが、集団の中での個の育ちが苦手な人が出てきている。この点をどのように考えているのか。
- 小学校から中学校に急に変わるような資料となっている。また、小学校の高学年において育てたい能力や態度が二つあるが、中学校1年生においてそれらがどのように展開していくと見ているのか、教育の担当者としてどのように考えているのか。

(事務局)

- 集団の中でのコミュニケーションがうまくとれないといった事案が出てきている。子どもたちの学びというのは、一人ではなかなか成立しないと思っている。少なくとも二人以上は必要ではないか。なぜかといえば、その中には必ず一つの出会いはある。そこから私たちは見方を広げたり、感じ方を豊かにする。そのようなところが学びとつながっていると思う。幼稚園や小学校の低学年は、ある意味では、きちっとした規律のある集団の中というよりは、群れの中で学びながらいろいろな感覚を豊かにしていく。その中で、他者と自分の感覚を自覚しながら、集団の中で自分を確立していくという独り立ちへの道筋になっているのではないか。複数の中での学びが大事になると思っている。
- 二番目の質問は、資料はざっくりと色分けして表現しているが、当然重なる部分がある。中学生とい

っても1年生と3年生では成長ぶりが大分違い、成長の違いに応じた目標というものもあるかと思う。ここにはざっくりと表してあるとご理解いただきたい。

(委員)

- 資料の4-2について、私たちPTAもこの表を活用させていただきたい。

(委員長)

- 長野市では、都市部と中山間地では児童生徒の状況が違い、市として支援しなければいけない内容が違うのではないかと。そのような話に展開するような構成になっていけばいいと思う。
- 学力など学校の授業をきちんとやるという点では、中山間地域での少人数教育は効果があるだろう。しかし、クラスの中で机が二つしかないような状況で6年間生活したらどうなるのか。もちろんいろいろな形でそれを補ってはいるが、そのような観点も必要だ。
- 18歳まで育てていく具体的な姿が、学校が置かれている環境、都市部と中山間地で全く違ってくる。その辺の考察も必要ではないか。別々の形で長野市は解決していかなければならない。

(委員)

- 中学校の教師をしていたとき、小学校によって学力がまったく違っていた。小学校の高学年では専門的な学力を育成することが大事だが、小規模校では教員が少ないので、専門的な教員が少ない場合もある。中学校は専門的な先生になるので授業が違ってくる。そのときに中学生の学力をどのようにして上げていくのかと疑問を感じることもある。それが中1ギャップにつながることもあるので、学力的な連携をどのように考えていったらよいかの方が大事ではないか。

(委員)

- 鬼無里小・中学校では平成30年度から小中一貫した教育を目指して、今、学校づくり委員会の部会でグランドデザインの検討を始めている。保育園と小学校の関連についてもグランドデザインの中にある程度加えたいと思っているが、文部科学省と厚生労働省との関係があり、なかなか難しいという指摘もある。その点についてはどうか。

(事務局)

- 学校制度という点からみると、そのような問題がたくさん出てくるが、子どもの育ちという点、教育の質という点からみる必要があるのではないかと。
- 子どもたちの成長、教育で望む姿が、日本で学校教育が始まった頃とは、今は全然違ってきている。地域の範囲をどのように考えるかという問題はありますが、子どもたちの学びの世界を広げるにはどうしたらよいかを考えていかなければならないと思う。

以上